アジア・キリスト教・多元性　現代キリスト教思想研究会
第 12 号　2014 年 3 月　111～118 頁

＜書評＞
岩野祐介著『無教会という教会――内村鑑三における「個人・信仰共同体・社会」――』（教文館、2013年）

渡 部 和 隆

本書は「内村鑑三のキリスト教思想の内実を明らかにすること」(15)を目的とした内村鑑三の研究書であり、著者が京都大学大学院文学研究科思想文化学専攻に提出した博士学位論文が基となっている。内村研究にはすでに様々な論点に関して評伝的・歴史的研究から思想的・神学的研究に至るまでの様々な方法論に基づいた広範囲にわたる研究の蓄積が存在しているが、本書の特色はその方法論と明確な問題意識とにある。著者は先行研究について、確かに、内村が社会思想家やジャーナリスト、聖書研究者や伝道者といった複数の顔をもつ多面的な人物であるため、それぞれの側面に関して多くの先行研究が蓄積されているが、そうした先行研究には「相互に有機的に結び付けられ、組織・整理された段階にある、とは言い得ない」(25)という問題があると指摘し、この問題に対して聖書解釈テキストに注目することで対処しようとしている。聖書解釈テキストへの注目こそ本書の最大の特色である。つまり「彼（＝内村）はまず聖書研究者として捉えられるべきであり、『社会思想家』『評論家』といった要素はそこから結果として出てきたものである考えるべきである」(27)というわけである。かくして、著者は内村の聖書解釈テキストに着目することで、内村の思想の諸側面がもつ神学的意味を明らかにし、内村の思想を統一的に解明していく。言い換えれば、著者は内村鑑三の思想について「いかなる聖書理解によるものか、聖書のどの箇所をどのように読んだことにより（さらにそれが内村の体験と結び付いて）生じた思想であるのか」(26)という観点から論じているのである。

ここで注意すべきことは著者が、過去の歴史上の人物である内村鑑三が本当は何を言おうとしていたかを残されたテキストから探るという歴史的探究の観点からではなく、現在の人間が内村の残したテキストから何を読み取ることができるかという解釈学的観点から内村の聖書解釈テキストを扱っていることである。著者は研究方法において、明示はしていないが、研究者なら誰でも陥らざるを得ない解釈上の問題、すなわち解釈学的循環を自覚し、現在の著者の地平から循環を意識的に開始する。著者自身の言葉で言えば、「人間内村の実像よりも、思想、それもテキストの形で残されたものから読み取れる範囲での内村思想を扱う」(22)ということである。このように、内村のテキストと研究者である著者自身との間の解釈

学的循環を打ち出して方法論に取り入れていることが本書の特色のひとつである。かくして、本書では、内村のテキストを自在に引用しつつ、聖書を解釈する内村の聖書解釈テキストを著者が解釈するという入れ子構造の論述が展開され、しばしば著者の解釈という形で内村のキリスト教思想の現代的意義が論じられていくのである。その際、著者は自らの問題意識を内村のキリスト教思想における宗教的なものと社会的なものとの結びつき、すなわち副題にあるような「個人・信仰共同体・社会」の関係に集中させている。つまり「なぜ内村は一方で信仰とは個人のものであるということを強く主張しながらも、同時に社会への働きかけをやめなかったのか、あるいは、社会とそれを構成する人間に対する希望をどこからどのように得ていたのか」(35)ということである。かくして、内村の聖書解釈テキストに基づきつつ、個人の信仰と社会的なものとの結びつきという観点から内村鑑三のキリスト教思想のさまざまな側面が論じられている。

本書は全体が5つの章から成り、それぞれの章が多くの節によって細かい項目に分かれて議論が精緻に展開されている。上述の問題関心に沿いながら議論を展開した結果、贖罪論や無教会論、万人救済説や接木論といった内村のキリスト教思想の主要な要素が一通り論じられていく。その大枠を示せば、以下の通りである。

第一章　はじめに

１－１　内村鑑三研究の意義と現状

１－２　日本キリスト教思想史研究の現状／日本キリスト教史研究の方法

１－３　内村鑑三研究において本稿がもちうる意義――題材としての聖書解釈

第二章　内村における個人の問題

２－１　個人の信仰

２－２　罪と義と自己の問題

２－３　内村における神と人間

２－４　内村における自由の問題

第三章　内村における信仰共同体の問題

３－１　個人と社会をつなぐものとしての信仰共同体

３－２　信仰共同体の問題

第四章　内村における社会の問題

４－１　個人の信仰が社会へと広がっていく仕組み

４－２　信仰と社会的実践

４－３　信仰と道徳

４－４　ルールとしての律法
４－５　国家論

第五章　まとめと展望
５－１　内村のキリスト教思想の特徴
５－２　日本社会での公共性構築における、キリスト教の可能性
５－３　内村鑑三とは何者であったのか

注
参考文献一覧
あとがき
索引

内容に関しては、全体を通して何度も反復される主題が存在し、それを軸に上述の問題意識に関する分析がなされ、さらにその分析結果をもとにエクレシア論や万人救済説論、社会改良論や国家論、道徳論や接木論といった様々な議論の分析に応用されている。紙面の都合上、全てを紹介するわけにはいかない。興味のある方には直接、本書を読むことをお勧めする。ここでは軸となる主題について紹介し、その他の議論に関しては簡単に触れるにとどめておく。

日本のプロテスタント・キリスト教では一般に、神と共にあるということは自己に逆らって神につくことを選ぶということを意味する。内村においてもこの自己否定の傾向は顕著であり、先行研究でもしばしばそのような指摘がなされる。しかし、著者は「自己とはこのように、厳しく否定されるべきものであるだけなのだろうか」(36)と問題を提起し、「内村においては、自己否定の段階を超えて、神に従う自己、というものがあり得ると考えられているのではないのだろうか」(36)と語る。なぜなら、神を義とする信仰が自己を否定するだけでは、そこから内村のような他者や社会との関わりが出てくることはないからである。したがって著者は内村においては「自己の否定が単に自己の否定で終わるのではなく、それを通して自己を肯定することに至る志向性が内村においては働いているのではないか」(36)と主張する。この自己否定を通した自己肯定という主題が本書全体を通して何度も反復されるのである。

最初にこの主題が示されるのは「内村における個人の問題」と題された第二章においてであり、具体的には神の義と人間の義との問題を扱うために内村のエレミヤ書解釈を分析する箇所においてである。著者は内村がエレミヤに「良心の覚醒」を見出している点に内村の社会性が見られることを指摘し、まさにこの点に上述の主題を見出す。著者は「エレミヤ書においてエレミヤが訴えるメッセージには不信仰、不正義に対する怒りが含まれているのであ

る。そしてそれが読者の良心を触発すると彼（＝内村）が考えているということは、そのような『間違ったもの』に対し義憤を発する人間の感覚を内村は信頼している、ということになる」(63)と述べ、「義憤を発する人間の感覚」を内村は肯定的に評価していたと主張する。このように著者は内村のエレミヤ書解釈から「義憤を発する人間の感覚」という自己否定を通した自己肯定という主題を見出すのである。これは続いて同じく内村の人間観を扱うために内村の創世記解釈が分析される箇所で詳細に反復される。内村は創世記のエデンの園や堕罪神話の解釈において、人間は不完全で受動的な存在でありながら自由意志によって制限外の知識を求めた結果として神との正しいつながりを失ってしまったと言うが、著者はここから人間が「『不完全』ということは、あこがれるべきイメージとしての完全性ということを、部分的ではあるが、捉えているということでもある」(84)と主張する。つまり、「人間にも、神との関係を取り戻したいという感情、あるいは神から離れ自己中心性に落ち込んでしまっている自らを嘆き悲しむ感情」(84)がある。確かに、堕罪している人間を救うのは神であって人間の努力ではないが、人間にも「神との関係を取り戻したいという感情」があるので「関係の回復は人間と無関係に、神により勝手になされるようなものではなく、人間にとっても深い喜びであるようなもの」(84)なのである。このように、著者はここで、内村は確かに救済における神の先行性と人間の不完全性を主張しているが、他方で、内村は人間の感情が果たす役割にも言及していると解釈し、上述の主題を反復している。「罪を厭い、自らの内部分裂に苦しみ、なんとかしてそこから逃れたいと思い、十字架のイエスによる贖罪に感謝し、終末的な救済の完成を待望する、それらの感情、感受性に対して、内村は確かに信頼をおき、高く評価しているのではないだろうか」(94)とあるように、著者は内村のキリスト教思想では人間の側の罪や不正に対する感受性が信頼され、それが自己否定を通した自己肯定として見られると主張している。そしてこの信頼があったからこそ、内村は社会に対する発信を行っていたのだと論じているのである。

「内村における信仰共同体の問題」と題された第三章でも、上述の主題が見られる。著者は内村における祈りの問題を分析し、確かに内村は祈りの際には自己を無きものとすると言っているが、「反省され、無きものとされるべきなのは自己中心性であって、自己そのものではないだろう。むしろ、『恩恵の受器』としての自己には積極的な意味が見出されるべきではないであろうか」(100)と述べ、自己否定を通した自己肯定の主題を再び見出す。この祈りの際の「恩恵の受器」としての自己という考え方はここでは、「恩恵の受器があるからこそ恩恵が受けられるのである。そして恩恵を受けるからこそ、神に深い感謝を抱くのである。この神に対する感謝は、それによって他の人間を愛し、あるいは他の人間と正しい関係を築くことにつながる。つまり自己の持つ受動的、あるいは感受的な力が、神を媒介として間接的に他者とのつながりを生じさせているとも言えるであろう。」(107) とあるように、他者との関係性や信仰の共同性へと展開される。人間の自己は神の先行性によってその自己中心性を否定されるが、恩恵を受けるための器としてはその存在を肯定され、その結果、恩

恵に対する感謝によって自己と他者との正しい関係へとつながっていくと著者は論じているわけである。これを具体的に祈りの問題に適用するならば、自分と他人とが自らの救いのために相互に祈り合うということを意味する。むろん、これは神と自己との間に他の人間が特権的に介入するということではない。内村において、救いとは自己が神の前に一対一で立つことで果たされるものである。しかし、著者は「罪人であり神の前では全く無力である一人ひとりの人間が神に対面するなどということは、その支えとして他の人間たちの祈りがなければ到底あり得ないとも考えられるのではないだろうか」(107)と言い、祈りの背後に他者のための祈りという一種の共同性を見出す。かくして、議論は内村における愛の問題に接続される。著者はいくつかの愛を主題とするテキストから内村が愛を相互作用的にとらえ、その根源を神に求めていることを論じている。内村によれば、自己愛や自分に近いものへの情の愛は元々人間に備わっているものだが、それでは広い社会性には結び付かない。ゆえに、神の愛が人間に働く必要が出てくる。人間は神の愛を受けてこそ他の人間を愛することができるのであり、神の愛への応答として他者への愛が生じる。愛は自己の外に向かい、相互作用する。神の愛に対する応答が他者への愛となって社会的なはたらきやある種の共同性につながっていくのである。個人の信仰を論じた第二章で見出された主題が、ここでは信仰の共同性、すなわち神から与えられた愛が自己から周囲の他者や共同体へ拡大していくという形で展開されている。続いて、著者は信仰の共同性を同胞への愛と敵への愛との二つに大別して論じていく。同胞への愛に比べて敵への愛は困難であり、神の愛によらねばならず、終末において完成するものである。愛の実践は終末への希望と重なるものであり、現世では完結せず、展開や変化を続けていく。したがって、内村は愛の作用する共同体が外へ拡大していくことを主張する。このようにして著者は、内村のキリスト教思想が、一方で自己中心性からの解放を唱えつつ、他方で自己否定を通した自己肯定によって自己中心性ではない形で自己を生かし、そこから神の愛への応答という積極的な意味を他者とのつながりに見出して他者との信仰の共同性をもつに至るものであることを明らかにするのである。

以上が分析の軸となる主題である。著者は第三章の残りの部分でこの分析結果をもとに、内村の教派教会批判やエクレシア論、さらには万人救済説をも論じていく。たとえば、エクレシア論において人間が「霊的であるということは、関係性を作ることへつながることでもあるのである。人間を突き動かし、一人ひとりの個人の枠を超えさせるようにはたらくのは、神の霊、聖霊である。」(164)「聖霊は直接的・直感的にはたらくというのではなく、具体的な人間を通して具体的にはたらくのである。聖霊のはたらきは人間同士の関係性を通して個人の内面に浸透し、その結果もまた柔和や赦しといった関係性にまつわるものとして、人間の外へと染みだしてくることになる。」(167)と著者が述べているところに上記の主題とその展開を確認できるだろう。また、万人救済説に関しても「救われた＝神に選ばれたのは、さらなる他の人々の救いのためである、と内村は解釈したのである。救われない人間とはまだ救われていない人間なのであり、まだ救われていない人間がいるということは、救われた

人間にとって大きな悲しみを感じさせることなのである。」(180)と述べているところにも上記の主題およびその展開を確認できるだろう。個人が救済を確信する過程において他者の救済という要素が必要とされるので、信仰共同体の外部にある他者をも含めた全人類の救済までも要請することにつながっていく。かくして、個人の信仰は共同体を形成し、その外部へ拡大していくのである。

第四章でも今までの主題をもとに内村の社会改良論や国家論、道徳論や接木論、さらにはナショナリズムの問題などが分析されている。ここでは内村の社会改良論を取り上げよう。内村の社会改良論は個人の内面の改革から出発して外に向かい、結果的に社会の改革に向かうものである。社会を構成する個人が神により変えられていくことで、結果的に個人の集まりである社会が変わっていく。この点で内村は制度や環境といった個人の外部から改革を始める社会主義と袂を分かつと同時に、伝道を間接的な社会改革の方法として選んだ。そして、そのような内村にとって「目指すべき社会のイメージは『神の国』的な宗教共同体のようなもの」(193)であっただろうが、「しかしそれはあくまでも、理想としての神の国を目指すのであって、この世に神の国そのものを現出されることが目的なのではない」(193)と著者は指摘する。というのも、「真の理想社会は、終末において神の手により作り上げられる」(193)ものだからである。ここには、「内村の目指した社会とは、選ばれた者だけが受け入れられるような狭いものではなく、現実の日本社会と重なりながらも、その枠を超えて世界へ広がっていくべきものでもあったのである」(193)とあるように、上記の主題およびその展開から来る社会観が潜んでいるのである。

最後の第五章で著者は全体のまとめに入り、内村の議論に対して評価と批判とを行っている。まず、著者は内村の社会改良論に対して次のような批判を加える。著者は「神により内面を変えられた人間が、いかに外の世界を変えていくことができるか、という問題については、内村は饒舌ではない」(252)ことを指摘し、内村においては具体的な社会変革策が終末における真の理想社会の到来という考え方によって全て相対化された結果、民主主義も帝国主義も一緒にして捉えられるようになってしまったと批判する。著者は「具体的な問題の解決は、すべて理想的に進むようなことはあり得ないのだから、よりよいあり方を模索しながら、一歩一歩進んでいくしかないであろう」(252)という観点から内村の社会改良論が「内向きな、非現実的なものと捉えられてしまうことにもなった」(252)と否定的に評価するのである。しかし、内村の議論に対し、著者は一定の評価も与えている。著者は内村にとって「キリスト教は宗教であって、社会正義を求める運動そのものではない」(198)が、しかし同時に「そのような運動、行動を支える精神性を導き出すものである」(198)ことを指摘し、そのような内村の考え方は「社会における宗教のある種の役割を示している」(198)と言う。内村の主張には宗教と社会との関係性を考える上で一面では妥当なものがあるというわけである。また、別の箇所では「最終的な神による決着を信じることにより、人間が心置きなく目の前の現実に向き合うことができるようになる、という面があるのも確かである」(253)

という評価もしている。宗教的なものにこそ、個人の努力や善意だけでは成し遂げられないことを成し遂げられるようになる可能性がある。つまり、「世界を変えようと行為していくのではなく、神の愛への感謝と応答を示そうとこの世界において行為していく中で、結果として世界を変えるような行為をなす」(253) のである。かくして、内村はこのようなことを起こす人間の可変性や感受性に対して期待を抱いていたことを著者は高く評価するのである。そして最後の節で著者は「内村鑑三とは何者であったのか」という問いを立て、「内村鑑三は、聖書のメッセージを説き明かした文章を、それ自体としても極めて魅力的な日本語による文章で、多く残した人物である。その著作により、時代を超えて聖書のメッセージを伝えようとする伝道者である。」(256)と結論づける。「内村を突き動かしていたのは、怒りや悲しみではなく、喜びだったのである。神が人間を愛しているということ、そのことを知る喜び、伝える喜びに支えられて、内村は、最期まで、諦めることなく、聖書の言葉を伝える事業に従事することができたのであった。」(258)として、著者は本書を締めくくっている。

以上、本書の概観を試みた。以下では、書評者の私見をいくつか述べてみよう。

I. 本書の特徴は内村の聖書解釈テキストを著者が現在の著者の地平から解釈することによって内村の様々な思想の内実を明らかにしたこと、特に彼のキリスト教思想と社会思想との関係を聖書という観点から統一的に明らかにしたことである。内村の聖書解釈テキストから内村の思想に迫る論文は近年になっていくつか現われてきているが、本書がその方法を内村の社会思想の研究に適用してその成果を出したことによって、その方法が内村研究においてもつ有効性と発揮する力が改めて確認されたと言ってよい。特に社会思想などの神学以外の側面においても聖書解釈テキストによる方法が有効であり、聖書解釈テキストから社会思想をはじめとする内村の思想の様々な側面が神学的意味によって統一的に論じられる可能性が示されたのは大きな意義を持つであろう。

II. その上で気になるのは、本書とこれまでに蓄積されてきた内村の評伝的・歴史的・実証的な研究との関連である。本書の方法ではテキストのうちに、テキストに直接には書かれていないところの解釈者の思想を読み込んでしまう可能性がある。むろん、本書は決してそのような研究ではないが、内村が体系的な論述を目指すタイプの思想家ではなく、むしろその時々の状況に応じて戦略を立ててテキストを執筆していくタイプの思想家である以上、テキストの背景を無視すると、そのような危険性は通常より高くなる。特に、聖書解釈から出発する本書の方法が、評伝的・歴史的・実証的な研究とは逆に、後期の聖書研究者内村から初期の社会評論家・ジャーナリスト内村へと遡行する形にならざるを得ないことは指摘されるべきであろう。内村は再臨運動に代表されるように時期によって変貌を遂げることがある思想家であり、内村内部での議論の変化も追う必要があるのである。

III. また、結論において著者は、先行研究が指摘するところの、内村のキリスト教思想は「スタンダードなキリスト教理解」(259)であるという見解を修正することはせず、内村のキリスト教信仰そのものは非常にオーソドックスだと結論づけているように思われる。書評者もこの見解にいくらかは同意するが、しかし、それだけでは問題も生じるようにも思われる。キリスト教思想の「スタンダード」なるものはキリスト教史全体を振り返ると、必ずしも自明ではない。この言葉はおそらく、日本のプロテスタント・キリスト教という極めてローカルな文脈の内部とその周辺でしか意味をもたない言葉である。それを無視して内村のキリスト教思想は「スタンダード」だとすると、極端な話、内村のキリスト教は欧米のキリスト教のコピーだということになり、したがって内村研究ないしは日本やアジアのキリスト教を研究すること自体に意味がないということにもなりかねない。仮に「スタンダード」を認めるとしても、内村は個別具体性をもった歴史上の人物であり、また近代日本という個別具体的な歴史的文脈のなかで生きた以上、一般的なレヴェルで「スタンダード」である内村の思想がそうした歴史的個別具体性のレヴェルに入った時に「スタンダード」ではない意味をもったはずであり、その意味のなかには一般的なレヴェルにまで反作用を及ぼすものもあったはずである。また、そのような反作用がなかったとしても、内村のキリスト教思想が「スタンダード」であるなら、内村の思想がもつ現代的意義は内村や無教会にとどまらず、そのまま「スタンダード」なキリスト教思想がもつ意義へとつながっていくはずである。本書が個人の信仰と社会との関わりを問うものなので、内村が生きていた日本社会との内村の関わりが一般的なレヴェルにまで影響を及ぼすことがなかったかがさらに問われるべきであろう。

もっとも、三番目の指摘は、本書のみならず、内村研究全般が抱えざるを得ない課題でもある。いずれにしても、内村の膨大な聖書解釈テキストを読み解いた結果である本書は、内村研究のみならず、キリスト教と社会との関係を考える上でも重要な示唆を与えてくれる本である。

（わたなべ・かずたか　京都大学大学院キリスト教学専修博士課程）